

鬼か神様か 県庁移転の立役者三島通庸

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

時代により評価が異なる人物として蒲生君平を紹介したが、地域によって評価が大きく異なる人物もいる。その代表例に三島通庸(みしま とおむね)がいる。自由民権運動を弾圧したことから鬼県令等と呼ばれる一方、東北開発での土木事業を推進したことから土木県令の異名を持ち、那須野が原開拓では功績を残したことから神として祀られている。

三島通庸は、天保六(一八三五)年鹿兒島市上ノ園町に下級藩士の長男として生まれる。戊辰戦争では武器弾薬や兵糧の輸送を受け持ち活躍。戦後は藩政改革に参加し都城の地頭に任命され、そこでの功績が大久保利通に認められ東京府参事として新政府に出仕する。その後、教部大丞を皮切りに、酒田県令・統一山形の初代県令・福島県令・栃木県令を経て、中央官庁に入り内務省土木局長、警視總監を歴任。在任中明治二十(一八八八)年、五十四歳で亡くなる。

三島通庸と栃木県との係わりは、那須野が原の開拓と県令として在任したことにある。那須野が原の開拓は、明治十二(一八七九)年十一月ごろ福島・山形県を訪れていた松方正義に勧められたことによる。江戸時代那須野が原の多くは、周辺地域の入会地として広大な原野が横たわっていた。明治期になると新政府は殖産興業政策の一環として那須野が原の開拓を推進したのである。明治十三(一八八〇)年三島通庸は、民間農場のトップを切つて農場を創設。農場の名前は肇耕社(後の三島農場)、社長は長男の弥太郎であったが、実質的経営者は通庸であった。

三島通庸の栃木県令在任期間は、明治十六(一八八三)年十月三十日から十八(一八八五)年までの一月二十二日までである。僅かに一年三カ月余であり、その間栃木県庁の移転、陸羽街道の改修工事等と一大事業を展開したのである。

三島が栃木県令として着任したころ、宇都宮では、町民の間で県庁移転が盛り上がりつつあった。県庁が栃木にあるのは位置的に偏りすぎる。宇都宮に県庁を移せば、県のはば中央に位置し、交通の要衝の地であり、那須野が原の開拓地にも近く便利だ等として栃木から宇都宮への県庁移転を国に働きかけたのである。丁度そのころ、栃木は自由民権運動が盛んであり、自由民権運動家と対立してきた三島にとつて県庁移転は渡りに船であった。

県庁移転の町民請願書が政府に認められ移転が正式に決定するや、三島は早速県庁移転に着手。新県庁舎敷地は、二里山。その他にも監獄や師範学校等の移転もあり、これに伴う街路の整備拡張もなされた。明治十七(一八八三)年四月九日敷地の地ならし工事開始、建築開始は七月一日、わずか四十三日間で竣工したという。一方、県庁の新築と並行して大通りの貫通工事が行われた。工期は実に一週間。こうした工事には、三島特有の地元民に対する半ば強制的な使役や献金の提出等を伴ったが、宇都宮町民の喜びは、それらにも増して大きかったようだ。十月二十三日の開庁式には、花火を上げ、各町は競つて山車や屋台を繰り出し、県庁周辺は空前の賑わいを呈したという。三島は自由民権運動家等にとつて鬼県令と映つたが、宇都宮町民にとっては土木県令としての面目躍如たるものを見た思いであつたに相違ない。



三島通庸肖像写真



いづれも那須野が原博物館所蔵

高橋由一作
石版画「栃木県庁の図」